

特集に寄せて

岩崎 稔

本学海外事情研究所として、ベトナム戦争の死者の墓碑や戦争記念碑を実地調査したのは、2007年2月中旬のことだった。研究所を拠点として進めている科研費プロジェクト「グローバル状況における《想起の文化》の総合的研究」の一環として、である。この旅行は、本学教授である今井昭夫を団長とし、ハノイから南下してそれぞれの地域の抗仏・抗米戦争記念碑、戦死者墓地、記念施設を見てまわり、フエ、ダナンを通過してホーチミン市まで至る旅程であった。途中、ミライ村虐殺事件の現場や記念碑や記念館も見た。車で移動しながら、車窓に予定外の記念碑を見つけたときにも、そのつど停車して、降りて歩くように心がけたが、村という村、地区という地区で、きまって規模が大きい比較的整備された墓地に出くわした。その圧倒的な数は、フランスの植民地支配と戦い、それに続くアメリカの侵略行為と戦ってきたベトナムの人々の歴史が、いかに多くの死者とともにあったのかを物語っていた。

それにしても、この墓地の数や形や存在感をどう考えればいいのだろうか。これが、調査を通してわたしたちのなかに堆積した問いのひとつだった。戦死者墓地は、たいいてい解放戦争の英雄の墓地として飾られ、整備されていた。軍人だけでなく、戦争のために犠牲になった軍人以外のひと

との墓石もある。どの墓地にも、きまって同じスタイルで、死者の名字が刻印されていない一定数の墓がある。混乱する戦闘の局面で、固有名も知れずに亡くなった、あるいは亡くなったことすら特定できない兵士の墓碑である。この社会において、死者を悼むことがいまだ落ち着きをもたない、荒ぶるままの魂の問題であることを示す端的な兆候であろう。この点において、わたしたちの念頭に浮かんだのは、柳田國男が敗戦直後の日本社会に向かって提示した『先祖の話』のことであった。柳田が筆を起したのは、アジア太平洋戦争の敗色が誰の目にも明らかになり、フィリピン戦線の崩壊、硫黄島玉砕、そして沖縄で県民を巻き込んだ壮絶な地上戦が戦われていた時期であった。たしかに『先祖の話』自体は、祖霊信仰学説の民俗学的集大成であるのだが、「戦後の読者を予期し、平和になってからの利用を心がけた」ものだという柳田は、この一冊によって戦後の何かを気遣った。柳田自身はこう述べている。

「家の問題は自分の見るところ、死後の計画と関連し、また靈魂の觀念とも深い交渉をもっていて、国ごとにそれぞれの常識の歴史がある。理論はこれから何とでも立てられるか知らぬが、民族の年久しい慣習を無視したのでは、よかれ悪しかれ多数の同胞を、安んじて追隨せしめることが出来な

6 特集に寄せて

い。家はどうか、またどうなっていくべきであるか。もしくは少なくとも現在において、どうなるのがこの人たちの心の願いであるか。それを決する為にもまず若干の事実を知っていなければならぬ。明治以来の公人はその準備作業を煩わしがつて、努めてこの大きな問題を考えまいとしていたのである。文化の如何なる段階にあるを問わず、およそこれくらい空漠不徹底な独断をもって、未来に対処していた国民は珍しいといつてよい。こういう時分がしばらくでも続くならば、常識の世界には記録の証拠などはないから、たちまちにして大きな忘却が始まり、以前はどうだったかを知る途が絶えて行くのである」¹。

ここで柳田を駆り立てているのは、死者の扱い方について無自覚な状況への危惧の念である。そこでかれが望んでいるのは、「ハレの斎場」としての「靖国神社」という国家装置による哀悼の方ではない。かれが目を凝らしているのは、死者の魂と、家や村落共同体との関係の危機である。つまり、死者の記憶をどのように共同的な記憶のなかに位置づけるのか、その危うさと深刻さに向かい合っている。アジア太平洋戦争の死者たちは、1942年以後、一気に増大していく。近代日本は、そのとき前例のない規模で、戦争による青年の死を抱えることになったのである。その若者たちの大量の死と、その行き場のなさ、その肉体の死だけではなく、死をめぐる世界像の危機であり、生と死の作法の混乱であった。柳田の慨嘆は、敗

戦にともなう混乱で、それが根底から忘却されてしまうのではないかという危機感だった。柳田がこれを「家の問題」として引き取ることや、両墓制論の解釈については措くとしても、少なくともこういう形で、多くの死者の哀悼の問題が、共同的な規範をめぐる深刻な危機を招くということ、わたしたちはこの事例から理解することができる。「日本保守主義の体験と思想」のなかの橋川文三の言葉を借りれば、幾百万の死者たちの魂の行くえに思いをこらし、その鎮魂を希求する一老翁の祈念とは、もし、それらの死者たちの魂の行く末をしっかりと見とどける少なくとも誰か一人の人物がいなければ、民族の過去と未来を結ぶ紐帯はバラバラに解体するであろうという直感」であった。

わたしたちがベトナムで目の当たりにしたのも、これと同然の問題であった。そのなかから、「想起の文化」をめぐる研究プロジェクトとして、とくに研究会議（2007年11月）を開催し、この論点に取り組むことにした。具体的には、人類学者である国際基督教大学のショーン・マラーニ准教授に、そうしたベトナムにおける戦死者の哀悼祭祀の現在について解明してもらうことになった。マラーニ氏は、ベトナムにおいて夥しい死者の哀悼の問題が、社会の規範や統合にも関わることとなっているとつとに指摘していたからである。

（いづさき みのる・東京外国語大学）

¹ 柳田國男『先祖の話』（筑摩書房、1946年）、3頁以下。